

第1回

安定したアタッチメントを育むための保育現場の役割
～多様なフィールドから考える～

講師 上野 永子 氏 岡村 由紀子 氏 松浦 崇 氏

〈上野 永子 氏〉

アタッチメントとは

私からは、アタッチメントの臨床心理学編としてお話しします。アタッチメントとは、何らかの危機的な状況に遭遇したり、危険を予測したりするときに生じる恐怖や不安といった否定的な感情を誰かに「くっついて安心したい」、もしくは、「慰めてほしい」という思いで、実際にくっつこうとすることです。この「誰か」はアタッチメント対象と呼ばれますが、誰でもよいのではなく、自分の世話をよくしてくれる特定の人物です。

アタッチメント行動システムと探索行動システム

人は、危険や不安など恐怖を感じる体験をすると、否定的な感情が出てきます。すると、アタッチメント行動システムが活性化します。その時、人は安全な避難場所である特定のアタッチメント対象に「慰めてもらいたい」という気持ちが高まります。そこでアタッチメント対象に慰めてもらい、心が落ち着くと、探索行動システムが活性化し、新しいものと関わることができます。これが、アタッチメント行動システムと探索行動システムです。安心感がないと子どもはいろいろなことに興味をもって新しいことに挑戦することができません。保育の現場では、子どもたちが、十分に安心して過ごせているかどうか大切になってきます。

アタッチメント理論の提唱者：ボウルビー

アタッチメント理論の提唱者ボウルビーは、施設で暮らす子どもや第二次世界大戦における戦争孤児についての調査研究で、「子どもの心身の健全な発達には乳幼児と母親（母性的養育を行う人物）の親密で継続的で、しかも両者が満足と幸福感に満たされているような関係性」が重要と主張し、その

関係性を追求し、アタッチメント理論を提唱するようになりました。そして、ここで注目していただきたいのは、ボウルビーは、その頃から子どもの心身の健全な発達に必要なのは、母親だとは言っておらず、母性的養育を行うものと言っています。

養育者以外がアタッチメント対象となる要件

養育者以外が、アタッチメント対象となる要件は、「身体的・情緒的ケアをしている」「子どもとその生活の中に一貫して、持続して存在している」「子どもに対して情緒的に投資している」と、あります。「子どもに対して情緒的に投資している」とは、例えば保育者の皆さんは、プライベートな時間を拠出して研修等に参加して、日ごろの保育をより良いものにしたいと考えます。それが情緒的に投資していることであり、また、家に帰ったふとした瞬間にクラスの気になる子のことを「あの子はなぜあんなことをしたんだろう」と思いを巡らすのも情緒的投資です。このように考えると、保育者は3つの要件を満たしており、保育者はアタッチメント対象であると言えます。

安定したアタッチメントを形成するかかわり

安定したアタッチメントを形成するかかわりとして大切なことは、「養育者が子どもの心の状態を知り、それを子どもに正確に映し出すこと」「その子どもの心の状態が、心配や恐れといったネガティブなものであれば、それを映し出すと同時に、子どもが安心感を得られるようにすること」です。つまり、アタッチメント行動システムが活性化されている子どもに対して「心配?」「恐かったね」と子どもの心を映し出し、「でも、大丈夫だよ」と、安心感を得られるようにすることです。不安感が高い保

護者に対しても、同じような対応が求められます。

保育におけるアタッチメント研究の知見

乳児期の母子のアタッチメントの質は、9歳時点での教師や友人との関係性に関連はありませんでした。しかし、乳児期の保育者とのアタッチメントの安定性が、9歳時点での教師や友人との関係性に関連があるということがわかっています。たとえ、乳幼児期の母子のアタッチメントが安定したものでなかったとしても、保育者と安定したアタッチメントが、後の人間関係の発達にプラスになる可能性が示されたと言えるでしょう。これは保育者の励みになる研究結果だと思います。

保育におけるアタッチメント研究

3歳以上になると、子どもはアタッチメント対象に近づいて慰めを求めるといふアタッチメント行動は、減っていくと言われていきます(当然、個人差があります)。しかし、これは、3歳以降になるとアタッチメント行動システムが活性化されないということではありません。アタッチメント行動に変化がみられる(例えば、アタッチメント対象に近づかなくても、優しい声かけで安心感が得られる等)ということです。保育者は3歳以降の子どものアタッチメントについても、きめ細やかに観察する必要があります。

また、ハウズらが保育者と子どものアタッチメントについて研究した結果、子どもと保育者のアタッチメントの安定性は、保育者が子どもそれぞれに目を向けつつも、集団全体に注意を払う態度と関連がありました。つまり、保育者は、子ども一人ひとりに目を向けるだけでなく、今、子ども集団全体がどのような状態かを敏感に感じ取り、集団に関わっていくことが、安定したアタッチメントの形成には重要ということです。しかし、新学期のような保育者が子どもと信頼関係を築く前は、保育者が子ども一人ひとりと十分に関わっていくことを重視することが必要です。

保育現場で知っておいてほしい子どもの心理的危機

- ・6か月から始める人見知り
- ・1歳2か月から2歳ごろまでの最接近期

- ・1歳半頃からの第一反抗期
- ・4歳頃の自分の思いと他者の思いのぶつかり合い
- ・環境の変化 ・弟、妹の誕生 ・養育者との別離
- ・養育者の病気

子どものアタッチメント行動システムが活性化しやすい状況を慎重に感じ取って関わっていくことが大切だと思います。

〈岡村 由紀子 氏〉

保育の中で育つアタッチメント

今日の話は3人とも「アタッチメント形成は、母親だけの役割ではない」ということをキーワードに進めていきたいと思っています。

実践事例の1歳児「ママがいいよ」は、「保育現場で知っておいてほしい子どもの心理的危機 1歳2か月頃から2歳頃までの最接近期」の場面です。一見慣れたようだったけど、不安になったときにその子が自分で立ち直っていくのを大人は丁寧に見守っています。大人が予想できないような姿を見せて育っていくのが子どもです。そういう子どもを理解するときの保育者の視点は2つあります。一つは、実践的な理解です。保育者が実践にかかわり、実際に見える子どもの保育場面の姿や家庭の姿から、現在の人間関係や興味関心を作る。もう一つが、発達の理解です。その時代にどんな特有の見方や考え方があるのかを知り、実践につなげていきます。ですから、私たち保育者は学び続けていくことで、子どもの中に何が育っていくかを知っていくのです。

もう一つの事例は、「保育現場で知っておいてほしい子どもの心理的危機 環境の変化」4歳児「かわりが苦手なあつしくんの1年」です。考察にもあるように、長い期間をかけて担任だけでなく園全体のスタッフで見守った事例です。保育者はその子の背景(発達や家庭環境)に着目し、それらを不安定になった理由にするのではなく、今のその子を受け止めていくことが大切です。そして「担任だから」「正規だから」と、決めつけるのではなく、その子が求める人が安心するアタッチメント対象であることを知ることが大切です。事例のあつしくんは、長い時間はかかりましたが、彼は仲間の中に安心を

求めて生活することができました。

保育の仕事の特徴

人格の形成とは、子どもの「体と心の主人公になる」力を育てる営みです。教え込むことではなく、子どもの持つ力を引き出す仕事は保育です。そのプロセスの中で、子どもが不安になったときにどう対応するかが、保育の専門性の問われるところです。

保育は、子どもとの間に信頼関係を作り、可能性に働きかける仕事で、サービスではありません。保育現場で見る子どもの姿は大人の望ましい姿ばかりではありません。泣いたり怒ったり嘔みついたり…という場面が多々あります。そういうときほど私たち保育者は専門職として、どんな子どもの姿にも共感し、本当の気持ちを理解して指導していくことが大切です。それが信頼関係の構築にもなります。子どもは、行動が不適切であっても保育者から心は否定されず、表し方を学ぶことによって、自己肯定感の土台が育っていきます。

家庭で育つ力と園で育つ力

では、園と家庭ではどちらがうのか。家庭で育つ力は、「無条件に愛される」という経験です。これは、個人的な濃密経験（基本的信頼感）です。一方で、園で育つ力は、「たくさんの憧れが育つ」経験です。園にはいろいろな子どもがいます。その中で子どもは自分の憧れと出会っていきます。集団的な濃密経験（社会的信頼感）と言います。

安心感と自己肯定感

親と離れて生活する集団場面であっても、個が大事にされ居心地がよく安心して生活するとき「自分は自分でいいんだ」の心が育ち、体と心の主人公になる自己肯定感が、育っていきます。この力は、人間が人間として生きていく時になくしてはならない力の一つであると言われているように、体と心の主人公になり、周りとの豊かな関係を作り人生を自分で切り開いていく力になっていきます。その力を育てていくためには、保育の指導の基本は、4つあります。一つ目は共感的指導です。これは上野先生のお話にあったとおり、アタッチメント欲求を理解する

ことです。二つ目は大切にされる経験です。これは、見方を変えると、子どもの権利条約でいう意見表明権に当たります。インクルーシブ保育にもつながります。三つ目が、夢中になる楽しい遊びの追求です。遊びに夢中になることで子どもが意欲的主体的になります。四つ目は、集団への指導です。子どもは安心すると自分を大事にして意欲的に他者につながり、自ら自分を変えにいく姿があります。保育者は誰もが安心して過ごせる対等で平等な環境を作ることが大切です。

年齢別自己肯定感形成の保育

集団保育は、「一人の育ちが集団を高め、集団の育ちが一人を高める関係性」（子どもが集まることによって生まれる教育力）に働きかける指導です。ですから保育場面では「個と集団」の両方向への指導が求められます。集団とは、自分の「ありのまま」を出し「受け止められる」関係であり、その結果自分の居場所になる集団関係です。上野先生の話の中で「アタッチメント対象は発達とともに変わる」とあるように、養育者中心だったアタッチメント対象は徐々に集団、仲間とのかかわりになっていきます。

- 1、泣くことから始まる…0 歳児 「抱きとめ合い」が大事です。
- 2、「いやいや！自分で！」が大切…1 歳児 いや！を大事に受け止めつつ返すことが大切です。
- 3、ますます強くなる自分の心…2 歳児 子どもの心を動かす方法は、子どもの思いや考えを考えながら、みんなで見つけていきましょう。
- 4、自己主張が強くなるが他者理解は難しい…3 歳児 集団の中で誰かに聞いてもらった、大事にされた経験を積むことが大切です。
- 5、他人の目が気になる…4 歳児 子ども同士のトラブルは、相手の思いを知るチャンスとして仲立ちしながら本音を言える指導が大事です。
- 6、折り合いをつける…5 歳児 仲間の中で自分の思いを出せていない子は支え、問題が生じたら集団で考えて合意を創る保育が大切です。

〈 松浦 崇 氏 〉

子どものアタッチメントと保育

～おとな・保護者の安心感に着目して～

私は、児童福祉、保育の政策や制度について専

門に研究しています。そこから保育の在り方について考えています。

今日はさまざまな社会的状況から影響を受けた保育の問題や子育ての問題から、大人に視点を当てて考えていきたいと思えます。家庭が、子どもにとって「安心の基地」となり、「安定したアタッチメント」を形成していくためには、保護者にも安心感が必要です。しかし、それは、自然発生的に、自助努力によって育まれるものではありません。家庭だけでなく、保育施設（保育者）を含め、社会全体が「安定したアタッチメント」の形成を支えていくことが重要です。

家庭・保護者に影響を及ぼす、さまざまな社会的状況

アタッチメントの重要性だけが語られてしまうと逆に母親の役割を強調して、子育て中の親にプレッシャーをかけ、追い詰めてしまいます。未だに根強い「母性神話」や「3歳児神話」も社会の一部だけでなく、身近な人にまで言われてしまうことにより、子育て中のお母さんたちは頑張りすぎてしまったり虐待につながったりしてしまいます。そういう親ほど過去の経験から「まわりに相談をしてもろくなことはない」と支援を拒んでしまう傾向があります。木村涼子著の「家庭教育はだれのもの？家庭教育支援法はなぜ問題か」の中で「母性愛神話は、不安や迷いを感じつつ子育てをしている母親を沈黙させる力をもっている。」とあります。母性の大事さを訴えていくと母親たちは「子育てがしんどい」と言えなくなったりしてしまいます。

子育て家庭・親の孤立

人類は、歴史的に見ると共同養育という形できょうだいや親族の力を借りて子育てをするのが一般的だったので、現代のように母親・父親だけが子育てをすることはありませんでした。一人で子育てをするとまるで世界に子どもと自分だけ取り残されてしまったような気持ちになってしまい、強い孤独感や不安感を抱えてしまいます。

孤立の中での子育て(孤育て)の要因の一つに「アウェイ育児」の広がりがあります。「アウェイ育児」とは、親が自分の生まれ育った祖父母や友達、知り

合いがいて、昔からの馴染みがある地域ではない場所で子育てしていることを言います(NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会)。現代ではそういう方たちが多くいます。「アウェイ育児」の人たちは孤独を感じ、「親として子育てのことをいろいろ学んでいきたい」と思っているのはもちろんのこと、その前に「誰かとつながりたい」「大人と普通に話したい」「自分の話を聞いてほしい」と思っています。

「自分を受け入れてもらいたい」という情緒的支援を求めています。

子育て支援というと、話を聞き、立派なアドバイスをしてあげなくてはと思ってしまいがちですが、ただ、そういう親子のことをじっくり見てくれて、話を聞いてあげる存在が地域にあることが大きな力になると思います。

現代のコロナの状況で登園自粛を余儀なくされた家庭も多かった中、園から「〇くんの様子は、どうですか?」「お母さんはお元気ですか?」と、園から連絡してくださったりしていろいろな働きかけをしてくださったことが、保護者にとって「自分のことを気にかけてくれている」という安心感につながっていきます。

今は、専業主婦が減り、共働き世帯が増えていきます。少子高齢化の時代で労働力が求められる中で、女性が社会で活躍することが期待されながら、一方で「子育てはちゃんとしなさい」という相矛盾することを世間から言われてしまいます。それが子育て中の親にとっては重圧になり、気持ちの余裕がなくなってしまう。そんなとき子どものことで問題が起きても望ましい対応ができなくなってしまう。アタッチメントとはネガティブな感情を子どもが出してそれを大人が受け止めるものですが、大人が受け止められる環境にないと、子どもはネガティブな感情を出すことすらなくなってしまいます。家庭の貧困や親の気持ちのゆとりのなさが子どもの笑顔を奪っていくのです。子育てしている親の社会的背景にも目を向けていくことが大切です。親の安心感が結果として、子どもたちの幸せにつながっていくのだと思います。

第1回 焼津市保育者資質向上研修会
令和3年7月16日(金)
会場: 焼津公民館 大集会室